

## 人の和・輪

園長 児嶋 草次郎

おそらくこの茶臼原の歴史の中で一番あたたかいこの冬も、立春を迎え、満開の梅の花の隣で、河津桜も咲き始めています。日本スイセンも多くの花をつけてくれ、私の部屋にも、暮れから欠かすことなくその花を飾ることができています。日本スイセンの香りは、魂の奥深いところを癒してくれます。おそらく真冬の一番寒い時に咲くこの日本スイセンは、長い長い年月を重ねるうちに、日本人の魂の中にまでその香りは到達するようになったのでしょうか。

私はこうして、「友愛通信」には、できるだけこの石井十次および岡山孤児院（茶臼原孤児院）の作り出した文化や自然環境について触れるようにして来ました。そのことが次の世代への伝承になると信じているが故です。28年近く書き続けて来て、今回初めて、岡山孤児院の歴史が産み出した言わば負の遺産について書かせていただきます。大きな課題を突きつけられています。

今から15年ほど前にできた映画「石井のお父さんありがとう」では、知的障がいの少年が自立していく姿も描かれていました。監督の山田火砂子さんは、石井十次は健常者も障がい者も平等に教育したので惚（ほ）れたというようなことをおっしゃっていました。そのことが映画を作る動機にもなったようです。共生社会の実現、今、私たちがめざしている理想郷がそこには一時期ありました。しかし、時代状況の変化は冷酷で、石井十次亡き後、その相互扶助は崩れていきました。

2018年9月に亡くなったK氏は、岡山孤児院卒院生の2世でした。父親の代に一農家として独立され、農業を営んでおられたのですが、引き継がれたK氏がいつ頃からか、ゴミを自分の敷地内に持ち込むようになったのです。この友愛社に隣接する土地であり、私は少年時代から彼の姿を見ています。やがて結婚し3人の子供さんを作られました。3人とも知的障がいを抱え、掘立て小屋の周囲を裸同然の格好で歩いているのを見るに忍びず、私の母が衣類を持って行ってあげるのを見たこともあります。時がすぎ、子供さんが自立し、やがて奥さんが亡くなりなす。葬式をする場所もなく、石井記念のゆり保育園を貸してあげたこともあります。K氏もそのうち年老いて、どこかの老人ホームへつれていかれました。K氏のいなくなった敷地には、大量のゴミと言うより産業廃棄物だけが残り、木々や竹に被われていきました。

今年度、石井記念のゆり保育園をそのK氏の土地の隣に移転新築することになるのを機に、その土地を石井記念友愛社で買いもどして、それらの廃棄物を片付けることを考えました。石井十次を初め当時の職員・子供たちが汗水たらして開拓した神聖な土地です。K氏だけを悪者にしてはいけません。知的障がいのK氏を騙すようにしてお金を握らせ、大量の産業廃棄物処理を頼んだ多くの業者がいるはずで、判断力の弱いK氏は、自分の土地に持ち込んだのだと思います。

その土地の名義が石井記念友愛社に変わるのを待ち、この度、業者に頼んで藪を切り払いゴミ類を集めてみましたら、驚愕するほどの多さで、搬出費用を5000万円と業者は見積もりました。想定外の桁が一つ違いました。

さて、どうするのか。ほんとうは、こういう負の歴史は表には出たくありませんでしたが、私たちの解決能力を超える課題を天より押しつけられましたので、石井十次がそうしたように、世間

の皆様と呼びかけ、「和・輪」の力を借りるしかありません。具体的に言うならば、寄付をお願いしながら、10年計画くらいで片付けていく以外ないのかもしれませんが。皆様のお知恵をお借りしながら進めていきたいと考えています。

(以下1月30日の石井十次記念式での挨拶です。)

本日は第106回石井十次記念式に御出席くださりまして、ありがとうございます。石井記念友愛社を代表しまして、一言御挨拶申し上げます。

まず、皆様に署名活動の件でお礼を申し上げます。御支援・御協力いただきありがとうございました。その経緯からお話ししますと、昨年の8月に石井十次セミナーを開催し、テーマ「日本の未来の児童福祉のあり方を考えるー日本型の児童の自立支援・教育を求めてー」でシンポジウムを行いました。そして最後に、シンポジスト4名（叶原土筆氏、潮谷愛一氏、藤野興一氏、菊池義昭氏）の皆様と一緒に考えた「宮崎・高鍋宣言」を会場で発表しました。結論の部分をもう一度ここで読ませていただきます。

「私たちは、グローバル化するこの社会の中で、欧米の価値観に流されることなく、先人たちもやったように、しっかり新たな文化の融合に挑戦します。家庭・里親・施設・地域、そして関係機関とが、連携・共生しあい、日本独自の子育て文化・福祉文化に新たな価値観も融合させ、また、妊娠期から青年期に至るまで切れ目ない新たな支援のあり方も探りながら、次世代の子ども達を養育・教育していくことを誓い願ひ、各自治体にもその一貫した支援体制作りを求めます。」

そして、その「宮崎・高鍋宣言」を根拠として、「家庭に恵まれない子ども達の生活の場を取り上げないで！」という見出しで、全国の皆様に向けて署名活動を始めました。

厚生労働省は、社会的養育・養護の世界に革命を起こそうとしているのです。平成29年8月2日に出された「新しい社会的養育ビジョン」がそのもととなるものです。一言で言えば、20%弱の社会的養護児童の里親委託率を10年間で米英並に70%以上（乳幼児については75%）にしようとするものです。そのための関係機関の新たな設置や改革も取りあげています。その数字が世界標準だとしているのです。まさにグローバル化です。それら一連の改革を「子供の最善の利益」の名のもとに行われようとしていますので、政治の世界で言えば、野党も口が出せません。

その方向が世界の流れだとするならば、私たち現場の間人もその流れに乗っかっていかねばなりません。しかし、私たちは、先人たちの築きあげて来た生活文化・福祉文化の中で現在仕事をさせていただいているのであり、その文化を守っていくことも私たちの使命と考えています。だから、私たちとしては革命的手法ではなく、先ほどの「宮崎・高鍋宣言」にもありますように、グローバル化するこの社会の中で、「家庭・里親・施設・地域、そして関係機関とが連携・共生しあい、日本独自の子育て文化・福祉文化に新たな価値観も融合させる」手法で改革に参戦したいと願っています。言わばグローバルとローカルを足したグローカルです。

ところが、先ほどの「新しい社会的養育ビジョン」は施設否定論の上に構築されており、その文章の中には受け入れられない言葉があります。乳幼児の「新規措置入所停止」とか「施設の滞在期間の制限」（乳幼児は数か月以内、学童期以降は1年以内）とかの文言がその文章の中に記されているのです。繰返しますが新たな目標は、「家庭・里親・施設・地域、そして関係機関」との連携・共生のもとに築き上げられるべきです。施設を否定して数字をあげようとする手段は、いずれ、アメリカやカナダのように混乱をまねきます。

そこで、私たちは、ソーシャルアクションとして、乳幼児の「新規措置入所停止」と施設滞在期間の制限の削除を厚生労働大臣に求めて署名活動を始めたのです。このへんのことについては、

何度も「友愛通信」で書かせていただきました。

日本全国から署名は集まって来ました。私たちが対象とする児童は、4万5000人ほどです。保育園の児童が全国に160万以上いることを考えると、社会的養育、養護の世界はほんとに小さな世界です。世間の人たちから見たら、ほんの一握りの集まりなのかもしれません。だから政治力もありません。私たちにできることは、署名活動くらいです。最初1万人を目標にし、結果的には本日現在で2万人の人たちが御協力くださいました。ここに心より感謝申し上げます。最初1万人にした理由は何かといいますと、石井十次の賛助会員が1万人だったからです。それくらいの人を和を作れば、あの「100匹目のサル」現象がおきるのではないかと予想したのです。一挙に拡散していくと願ったのです。結果は約2万人（2月10日現在で30495人）です。この数字をどうとらえるべきか、今後の動きをどう読むべきか、今のところ私には判断ができません。

この署名を2月中には厚生労働大臣のところへ持って行く予定です。今、秘書の方と日程調整中です。（新型コロナウイルスによる感染症拡大のため3月以降に延びそうです。）私はこの時、今春大学を卒業する3名の友愛園卒園生を連れて行く予定です。彼らの口から、あの2点が、いかにこれから学ぼうとしている多くの児童養護施設の子供たちの夢や希望を奪うことになるのかを訴えてもらおうと思っています。その結果を見て、次の展開を考えていかねばならず、4名のシンポジストの先生方と協議したいと思います。

石井十次は、人の和・輪を作ることで危機を乗り越えていきました。人の和・輪を作ること、つまり「共助」は福祉の原点です。先人たちは、その手法をしっかりと私たちに示してくれています。それに学びたいと思います。

さて、次に石井記念友愛社の事業で今直面しているものについて3点ご報告致します。

現在、石井記念のゆり保育園の移転新築事業を行っています。木城町からの御指導・御支援も受けながら、工事は順調に進んでいます。今年の4月から西都市側から木城町側に移ります。私はここでグローバリゼーションに耐えうる子供たちを育てたいと考えています。保育所から幼保連携型認定こども園に変わります。つまり、教育を取り入れていきます。日本独自の教育文化に欧米の価値観を融合させる教育です。友愛園の幼児さんも通えることになります。

しかしここで大きな壁に直面しています。工事とは直接関係ないのですが、長年ずっと心を痛めて来た問題があります。今回初めて公表します。保育園は、この地区の運動公園の一面に建てさせていただいているのですが、そこと友愛園の園舎との間にK氏（故人）の土地がありました。その土地に50年以上に渡って産業廃棄物が捨てられて来たのです。もともとは、石井十次と子供たちが必死に開拓した土地の一部です。院児の一人であったK氏の父親がその土地に独立し、農業を営んでいましたが、息子K氏の代になり、様々なゴミを持ち込むようになりました。K氏は知的障がいを負っておられ、様々な業者から出された廃棄物を引き受け持ち込んだようです。トラクターに連結した荷台に山のように積んで持ち込む姿を、私は覚えています。当時は規制する法律もなく、地区の方々も黙認するしかありませんでした。K氏が知的障がい者だったことを考えると、一人の被害者でもあったと、今判断できます。

私は、この際、この土地を石井記念友愛社で買いもどして、元の神聖な土地にもどし、のゆり保育園の子供たちの遊び場として整備したいと考えました。その手続きを進め、この度、業者に頼んでうっそうと茂った藪を切り払い廃棄物をユンボで集めてみましたら、予想をはるかに越える厩大（ぼうだい）な量であることが分かりました。廃棄物として搬出するための費用を見積もってもらいましたら、なんと5000万円を越えており、愕然（がくぜん）としております。とても私たち石井記念友愛社で担える金額ではありません。この廃棄物を放置して来た行政にも責任があると考え、

木城町にも助けてほしい旨の要望書を提出しましたが、民のことに公金を出すことは難しいと返事をいただいております。

これは、岡山孤児院の負の遺産と言ってもよいでしょう。木城町の負の遺産でもあります。これらを、次の世代に押しつけるわけにもいきません。私たちの手で何とかしなければなりません。皆様方のお知恵をいただければと願っています。

もう一つ報告させていただきます。次は良い話です。現在、友愛社友愛園から大学に通っている青年が10名ほどいます。様々な経済的支援のおかげで通えるようになりました。今年は3名卒業しますが宮崎県の教育採用試験にも合格するなど、良い結果も出して来ています。

しかし一方病気で亡くなったり、退学者が出るなど無念な結果も出始めています。職員も度々支援に出かけて行きましたが、限度もあります。

そこで考えましたのが、大学生たちが一緒に生活できるシェアハウスの設置です。延岡市の九州保健福祉大学には6名が在籍しています。この地に設置できる見通しができました。県外のある方からはこのために1000万円の御寄付もいただきました。

今春3名がまた大学に進学しますが、そのうちの1名は岡山県内の大学に行きます。その学生には、後援会石井十次の会のある会員の方が“自立支援里親”のような存在としてサポートくださることになりました。子供たちにとっても心強い存在になってくださるでしょう。先ほどもお話しさせていただきましたが、人の和・輪ができていくことで、課題も一つ一つ克服していくことができます。新しい試みとなります。

多くの支援者の皆様のお力をお借りしながら、これからも一步一步子供たちの未来作りに挑戦していきたいと思っております。これからも御指導・御支援よろしくお願い致します。石井十次や当時の職員・子供たちの墓前において、今後も邁進していくことをお誓いし、理事長としての挨拶とさせていただきます。